

(PDF 版・3の8)『教会教義学 神論 I / 1 神の認識』「五章 神の認識 二十六節 神の認識可能性」「一 神の用意」

(文責・豊田忠義)

「五章 神の認識 二十六節 神の認識可能性」「一 神の用意」(115-231 頁)

「一 神の用意」

われわれが、(PDF 版・3の5)と(PDF 版・3の6)で述べてきた(1)から(4)までの「脈絡全体の中で、……〔根本的包括的な原理的な批判的立場で、〕暗黙のうちに向かい合っていた対話相手〔すなわち、「われわれの反対」する対話相手〕は、「<ローマ・カトリック>教会の基本的な神学の中に、その古典的な最も鋭い表現を見出した神の認識可能性についての教説〔すなわち、「神の一つの面だけを……考える」分割、「主および創造者なる神だけを考える」分割、このことを「念頭に置いた神の認識可能性」の教説〕である」。

前段における「第一の対立は、われわれを、直ちに第二のさらに重要な対立へと導く」。区別を包括した単一性において、先ず以て、「第二の問題」である「神の本質を問う問い」(「神の本質の問題」)を包括した「第一の問題」である「神の存在を問う問い」(「神の存在の問題」)を要求するところの、第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているイエス・キリストにおける神の自己「啓示自身が……啓示に固有な自己証明能力」(『教会教義学 神の言葉』の<総体的構造>(『知解を求める信仰 アンセルムスの神の存在の証明』)を持っていることからして、「われわれが、神の認識可能性を問う問いに答えるに当たって念頭に置いた神の単一性は、「自己自身である神」としての自己還帰する対自的であって対他的な完全に自由な聖性・秘義性・隠蔽性において存在している(それ故に、ここにおいては、われわれは神の不把握性の下にある)「神の<内>三位一体的父の名」・「父なる名の<内>三位一体的特殊性」・「三位相互<内在性>」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする「三位一体の神」としての「神の業と行為〔すなわち、「われわれのための神」としてのその「外に向かつて」の外在的な「失われない差異性」の中での三度別様な三つの存在の仕方(性質・働き・業・行為・行動、外在的本質)、父、子、聖霊なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事全体]の単一性であった」。バルトは、『教会教義学 神の言葉』で、次のように述べている——「自己自身である神」としての「三位一体の神の根源」・起源である「父は子として自分を自分から区別するし、自己啓示する神として自分自身が根源である」、それ故に「その区別された子は父が根源であり」、「神的愛に基づく父と子の交わりとしての聖霊は父と子が根源である」——この神は、「われわれのための神」としてのその「外に向かつて」の外在的な「失われない差異性」における三度別様なその

第二の存在の仕方である「子としてのイエス・キリストの中で、〔起源的な第一の存在の仕方である〕創造主として〔イエス・キリストの父として〕、われわれの父として自己啓示する」、また自己還帰する対自的であって対他的な完全に自由な聖性・秘義性・隠蔽性において存在している「三位相互＜内在性＞」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在本質とする「自己自身である神」としての「三位一体の神」からすれば、起源的な第一の存在の仕方であるイエス・キリストの「父だけが創造主なのではなく、子と霊も創造主である」し、「父も創造主であるばかりでなく、子に関わる和解主であり、〔第三の存在の仕方である神的愛に基づく父と子の交わりとしての〕聖霊に関わる救済主でもある」、換言すれば「聖霊」は、神的愛に基づく「その交わりの中で」、「啓示者」・「創造者」であるイエス・キリストの「父は、〔「啓示」、「和解者」である〕子の父、言葉の語り手であり」、「啓示」・「和解者」である「子は、〔「啓示者」、「創造者」である〕父の子、語り手の言葉である」ところの「行為〔・性質・働き・業・行動、「啓示されてあること」〕」、すなわち「聖礼典的な実在」としての「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）・「救済者」である。

われわれは、「自己自身である神」としての「三位一体の神」としての神を、「主、創造者、和解者、救済者として、……われわれの間で、われわれに対して、現にいます裁きと恵みの歴史の主体として……理解した。まさにそのようにしてこそ、昔いまし、今いまし、将来もいますであろう方として〔「三位相互＜内在性＞」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在本質とする「自己自身である神」としての「三位一体の神」として〕、したがって、最高に現実存在する方として、しかしわれわれのために、〔「われわれのための神」としてのその「外に向かって」の外在的な「失われない差異性」の中での三度別様な「三つの存在の仕方」（性質・働き・業・行為・行動、外在本質、父、子、聖霊なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事全体）における〕その業と行為の中で存在する方として理解した」——「福音書の中ではすべてのことが受難の歴史に向かって進んでおり、しかもまた同様にすべてのことは受難の歴史を超えて甦り・復活の歴史に向かって進んでいる」、すなわち「旧約〔「神の裁きの啓示」・律法〕から新約〔「神の恵みの啓示」・福音〕への〔復活に包括された〕キリストの十字架をもって終わる古い世〔・時間〕は、復活へと向かっている」（『教会教義学 神の言葉』）。

「＜この＞存在する方の認識可能性を、この歴史の主体のリアルな存在の真理を、われわれは問うた。そして、その問いに対して、われわれは、神の認識可能性は〔神のみ心に適う〕適意である、という答えを与えた。神の認識可能性は、神的介入の行為の中での出来事であり、それ以外の何ものでもない」。詳しく言えば、イエス・キリストにおける神の自己啓示からして、神の認識可能性は、その「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」（『教会教義学 神の言葉』）の＜総体的構造＞（『知解を求める信仰 アンセルムスの神の存在の証明』）——すなわち、客観的な「存在的なく必然性>」

と主観的な「認識的なく必然性」を前提条件とするところの（換言すれば、神のその都度の自由な恵みの神的決断による客観的なその「死と復活の出来事」におけるイエス・キリストの「啓示の出来事」と、その「啓示の出来事の中での主観的側面」としての「復活され高举されたイエス・キリストから降下し注がれる霊である」「聖霊の注ぎ」による「信仰の出来事」に基づくところの）、客観的な「存在的なくラチオ性」——すなわち、三位一体の唯一の啓示の類比としての神の言葉の實在の出来事である、それ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している「啓示ないし和解の實在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉（「最初の起源的な支配的なくしるし」）であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」（換言すれば、聖霊自身の業である「啓示されてあること」・「キリスト教に固有な」類と歴史性の関係と構造（秩序性）、「聖礼典的な實在」）におけるその最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の實在」としての第二の形態の神の言葉（「啓示との＜間接的同一性＞」において存在している、換言すれば啓示との区別を包括した同一性において存在している、その最初の直接的な第一の「啓示のくしるし」）である聖書、その聖書を「聖書への絶対的信頼」（『説教の本質と実際』）に基づいて自らの思惟と語りにおける原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準として、終末論的限界の下でのその途上性で、絶えず繰り返し、聖書に聞き教えられることを通して教えるという仕方で、純粋な教えとしての第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているキリストにあっての神としての神、キリストの福音を尋ね求める「神への愛」（「教えの純粋さを問う」＜教会＞教義学、＜福音主義的な＞教義学の問題）と、そのような「神への愛」を根拠とした「神の讃美」としての「隣人愛」（区別を包括した単一性において、その教会教義学に包括された「正しい行為を問う」特別的な神学的倫理学の問題、純粋な教えとしてのキリストの福音を内容とする福音の形式としての律法、神の命令・要求・要請、全世界としての教会自身と世の全ての人々が純粋な教えとしてのキリストに福音を現実的所有することができるためになすキリストの福音の告白・証し・宣べ伝え）という連関と循環において、イエス・キリストをのみ主・頭とするイエス・キリストの活きた「ヒトツノ、聖ナル、公同ノ教会」共同性を目指した・目指す教会の＜客観的な＞信仰告白および教義 Credo としての第三の形態の神の言葉に属する教会の宣教に連帯し連続して行く出来事以外の何ものでもない（Ⅰコリント 1・12-13、3・4-7、3・10-11）——「それ以前に語られた神ご自身の言葉……と自分を関わらせている……時、正しい内容を持っているということであり、われわれ以前の人々によってなされた教義学的作業の成果は、根本的には……真理が来るといふことのくしるし」である」（『教会教義学 神の言葉』）、それ故に最善最良の教会の宣教を尋ね求めた牧師であり神学者であったバルトは、「聖書釈義と絶えず接触を保ちつつ、また教会の古今の注解者・説教家・教師の発言を批判的に比較しつつ、その時々の現在における教会の表現・概念・命題・思惟行程の包括的研究において『教義そのもの』を尋ね求めた」（『啓示・教会・神学』）。もしもそう

でないならば、もしも神の側の真実としてある「神的介入の中で・神的介入と共に措定されるデキル」（神の認識可能性）でないならば、自然神学の段階においてローマ・カトリックのように神の認識可能性について主観的にどんなに「神的介入の中で・神的介入」なしにも措定デキルと考えていても、客観的にはその時にはその神認識は、結局は、類的機能を持った自由な人間的理性や際限なき人間的欲求やによって対象化され客体化された人間的な自然（人間の観念的生産物）としてのその人間の意味世界・物語世界・神話世界、「存在者」、「存在者レベルでの神」、「存在者レベルでの神の啓示」、「存在者レベルでの神への信仰」におけるそれではないものであるから、根本包括的な原理的なフョイエルバッハの宗教批判（自然神学の段階にあるキリスト教批判）の対象そのものでしかないものとなるのである——その時には、「神とはまさに、〔第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているキリストにあつての神ではないのであって、ただ〕人間の想像能力・思惟能力・表象能力の本質が、現実化され対象化された……絶対的な本質（存在者）、……と考えられ表象されたもの以外の何物でもない（『フョイエルバッハ全集第12巻』「宗教の本質にかんする講演 下」）、「もし君が無限者を思惟するならば、そのとき君は思惟能力の無限性を思惟し且つ確証しているのである。そして、もし君が無限者を情感するならば、そのとき君は感情能力の無限性を情感し且つ確証しているのである。理性の対象とは自己自身にとって対象的な理性であり、感情の対象とは自己自身にとって対象的な感情である」、それ故に「（中略）神の意識は人間の自己意識であり、神の認識は人間の自己認識である」、「（中略）神の啓示の内容は、〔第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているキリストにあつての〕神としての神から発生したのではなくて、人間的理性や人間的欲求やによって規定された神から発生した……。 （中略） こうして、この対象に即してもまた、『神学の秘密は人間学以外の何物でもない！』……」（『キリスト教の本質』）。また、その時には、ハイデッガーからは、そのような「いわゆる存在者レベルでの神への信仰は、結局のところ〔第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているキリストにあつての神としての〕神を見失うこと」になるから、「それよりは『むしろ無神論という安っぽい非難を受け入れた方がよい』」と「揶揄」・批判されてしまう（木田元『ハイデッガーの思想』）。

さて、「ローマ・カトリックの教説は、いずれにしても、その問いを問うていないのである〔すなわち、われわれが問うたところの、第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているイエス・キリストにおける神の自己啓示に基づいた「神の認識可能性を問う問い」を問うていないのである〕。このような訳で、「またその答えである〔第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされている〕神の啓示なしにも認識できる神の認識可能性についてのその命題は、その問いに対する答えではないのである〔すなわち、われわれが問うたところの、第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているイエス・キリストにおける神の自己啓示に基づいた「神の認識可能性を問う問い」に対す

る答えではないのである。したがって、ローマ・カトリックの教説は、客観的な正当性と妥当性のある怨本的包括的な原理的な宗教批判としてのキリスト教批判であるフォイエルバッハのキリスト教批判を包括し止揚することができないのである（フォイエルバッハ『キリスト教の本質』、『宗教の本質にかんする講演 下』）、ハイデッガーの宗教としてのブルトマン神学批判を包括し止揚することができないのである（バルト『ルドルフ・ブルトマン』および木田元『ハイデッガーの思想』）。「なぜなら、〔そのことをローマ・カトリックは理解しなかったが、直観と概念を用いた類的功能を持つ人間の自己意識・理性・思惟に基づて生み出される人間的な自然（人間の観念的生産物）としての〕思想は物質ではなく外化された観念である」から、その思想としての「観念の運動は観念〔思想〕によってしか埋葬されず、甲の観念〔甲の思想、その甲の思想にある根本的包括的な原理的な問題〕は、乙の観念〔思想〕がそれを包括し、止揚することによってしか……亡びない〔埋葬できない〕からである」（吉本隆明『カール・マルクス』）。言い換えれば、ローマ・カトリックは、客観的な正当性と妥当性をもった根本的包括的な原理的な自然神学の段階における宗教に対する批判をなしたフォイエルバッハやハイデッガーが提起したその問題を、その教説によって包括し止揚することをしなかったし、包括し止揚することができなかったのである、その「問題を明確に提起すること」ができなかったのである（「問題の定式化〔問題を明確に提起すること〕は、その問題の解決である」マルクス『ユダヤ人問題によせて』にも拘わらずである）。「人がまたワレワレノ主という定式的な表現を抜きにして考えるならば、ヴァチカンの文書のあの箇所などの言葉からも〔「神の一つの面だけを……考える」分割、「主および創造者なる神だけを考える」分割、このことを「念頭に置いた神の認識可能性」の教説のどの言葉からも〕、そこで語られている神が、……そこで、人間にとって生と死が、祝福と呪いが、いやそれだけでなく、そこで神にとってその名誉が、まさにそのようにしてこそ神の愛の奇蹟が問題であるところの、人間と関わる業と行為に従事しておられるということは読みとることができない〔すなわち、人間と関わる、父、子、聖霊なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事全体に従事しておられるということは読みとることができない〕。「自明のことながらローマ・カトリックの教説は、その業と行為について、神的な行為の必然性と現実性について知っている」が、形而上学的にその一面だけを抽象し固定化し全体して（その一面だけを拡大鏡にかけて全体化して）、それ故に抽象的ニ「神の一つの面だけを……考える」分割、「主および創造者なる神だけを考える」分割、このことを「念頭に置いた神の認識可能性」のローマ・カトリックの教説においては、「それとして抽象的ニ見られた神の存在が問題であるような……神と関わって行く」ことをしており、「その中ではまだその業と行為の中での神の存在が問題ではない」のである〔その中ではまだ、第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているキリストにあっての神としての神の、父、子、聖霊なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事全体が問題ではないのである〕」。ローマ・カトリックの教説は、

「先ず第一に、神、換言すればスベテノ物ノ始メト終局、創造者なる神はくいます」ということを確認する。「そして、この確認を念頭に置いて、〔ローマ・カトリックの教説は、「気楽に」、〕神は認識可能であり、〔第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているキリストにあっての神としての〕神の啓示なしにも認識可能であるという決定を下すのである」。そこでは、第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているキリストにあっての神としての神の「啓示なしにも認識できるということが主張されている〔形而上学的にその一面だけを抽象し固定化し全体化した、それ故に〕抽象的ニ見られた<神>の<存在>に相對して、……〔われわれ人間は、「神に敵対し神に服従しない」し、「肉であって、それ故に神ではなく、そのままでは神に接するための器官や能力を持ってはいない」（『教会教義学 神の言葉』）にも拘らず、またわれわれ人間は、生来的な自然的な「自分の理性」や感性力・悟性力・意志力・想像力・自然を内面の原理とした禪的修行等々生来的な自然的な「『力によっては』全く信じることができない」（『福音主義的神学入門』）にも拘らず、それ故に第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされている「イエス・キリストが父として啓示する神は、われわれの生を、死を通して永遠の生命に導くために死を欲し給う神である」にも拘らず、「創造が無からの創造であるように、和解は死人の甦りある」にも拘らず、徹頭徹尾「創造主なる神に生命を負っているように、和解主なる神に永遠の生命を負っている」にも拘らず、そのような生来的な自然的なわれわれ<人間>に対しても、何らかの意味で〔キリストにあっての神としての神と同じような〕<存在>が帰せられており、「〔聖書の主題であり、同時に哲学の要旨である〕神と人間との無限の質的差異を固守するという<方式>（『ローマ書』）を堅持しないで、〕神と人間は、……さし当って両者にとって共通的な、……中立的な地盤の上で一緒に見られているのである。その地盤の上で、〔第三の形態の神の言葉に属する全く人間的な教会である〕ローマ・カトリックの教説に従って真理問題において決断が下されるのである」。その<自然的な>信仰・神学・教会の宣教の段階において、生来的な自然的な「人間ノ自然理性ノ光ニヨッテ、被造物ヲ通シテ、確實ニ認識スルコトガデキルト確信シ、教エル」という決断が下されるのである、「ワレワレノ主デアル唯一ノ真ノ神ハ、〔生来的な自然的な〕人間理性ノ自然的ナ光ニヨッテ、被造物ノ中カラ確實ニコレヲ認識スルコトガデキナイト言ウ者ハ<排斥サレル>」という決断が下されるのである、ちょうどアウグスティヌスが、イエス・キリストにおける神の自己「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力に信頼しない」で、自然神学の段階における「存在の類比」において、「存在するものそのもの、その純然たる造られた存在に依拠して」、「造ラレタモノヲトオシテ、知解サレタ創造主ヲ認識シテ、私タチハ三位一体ナル神ヲ知解スルヨウニシナケレバナラナイ、ソノ跡ハフサワシイカタチデ被造物ノウチニ顯レテイルノデアル」と思惟し語ったように。ここにおいては、まさに自然神学の段階における「宗教とは、すべての神崇拜の本質的なものが人間の道徳性にあるとするような信仰であるとしたカントは、本源的であ

るゆえに、すでに前もって〔生来的な自然的な〕われわれの理性に内在している神概念〔人間に内在する神的本質、人間の内なる神〕の再想起としての神認識という点で、アウグスティヌスの教説と一致する」（『カント』）。ここにおいては、「神の認識可能性は、まさにこの神とわれわれ人間を〔区別しない〕包括する存在者の類比から成り立っている」。ローマ・カトリックが、「もしも……その業と行為の中での＜神＞に対して、そして……もっとも無限に遠い、質的な距離を隔てている……人間に対しても、＜存在＞を帰するならば、その時」、ローマ・カトリックは、「神と人間との間の＜一つの＞類比を、したがって〔第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされている〕啓示の外にもある〔自然神学の段階における〕神の認識可能性の＜一つの＞点を承認した」ことになるのである。言い換えれば、その時、ローマ・カトリックは、自然神学の段階において、「＜存在するもの＞の類比、存在ノ類比を、もっともその場合存在に対する神と人間の関係はそれぞれ全く違ったものであり、神と人間は存在に対して全く違った仕方で参与するのであるが、いずれにしても〔自然神学の段階において〕神と人間が一緒に把握される存在理念を承認した」ことになるのである。その時には、例えば「内被造世界での……父」から「神の内三位一体的父」を類比することを承認したことになるのである。しかし、それに対して、第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているキリストにあつての「特別啓示」、啓示の真理、「恵ミノ類比」（「啓示の類比」、「信仰の類比」、「関係の類比」）、＜非＞自然神学の段階で思惟し語るバルトは、『教会教義学 神の言葉』で、次のように述べている——「内被造世界での、……父という呼び名は確かに真実であるが、非本来的なものであり、神の内三位一体的父の名の力と威厳に依存しているものとして理解されなければならない」、と。それだけでなく、人間の危急、人間の無神性・不信仰・真実の罪は、「存在ノ類比」を介したそれは非本来的なものであるのであつて、それ故にわれわれは、イエス・キリストにける神の自己「啓示自身が持つてゐる啓示に固有な自己証明能力」の＜総体的構造＞に基づいてだけ認識することができる、ちょうど客観的なその「死と復活の出来事」におけるイエス・キリストの「啓示の出来事」をその「啓示の出来事の中での主観的側面」としての「復活され高擧されたイエス・キリストから降下し注がれる霊である」「聖霊の注ぎ」による「信仰の出来事」に基づいて与えられる信仰の認識としての神認識、啓示認識・啓示信仰、人間的主体に実現された神の恵みの出来事——この「信仰の類比」を通して、われわれは、「生来人間は、〔人間論的な自然的人間であれ、教会論的なキリスト教的人間であれ、誰であれ、〕神の恵みに敵対し、神の恵みによって生きようとしなが故に、このことこそ、第一に恵みが解放しなくてはならない人間の危急であつた」ことを自己認識・自己理解・自己規定させられる、また「神の選びをイエス・キリストの復活において認識」させられ、「神の放棄をイエス・キリストの十字架において認識」させられる。「われわれが本当に〔第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされている〕神の啓示を認識する時、われわれは初めて、神に対する人間的反抗、神の敵、神に相對して、自分

の力を誇り、まさにそのことの中でこそ罪深い墮落した人間として自分自身を、またそのような人間の世〔・時間〕を自己認識・自己理解・自己規定させられる。

その内在的本質が肉となったのではなく、その「外に向かつて」の外在的な第二の存在の仕方における「＜言葉が肉となった＞」——「これが、すべてのしるしの＜最初の、起源的な、支配的なしるし＞である」、換言すれば＜それ＞は、人間的に自由な人間的理性や際限なき人間的欲求やによって恣意的独断的に対象化され客体化されたに過ぎない人間的な自然（人間の観念的生産物）としての「存在者」では決してなく、徹頭徹尾神の側の真実としてある、「自己自身である神」としての「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする「三位一体の神」の、「われわれのための神」としてのその「外に向かつて」の外在的な「失われない差異性」における第二の存在の仕方における言葉の受肉としての「存在者」〔「ナザレのイエスという人間の歴史的形態」としての「イエス・キリストの＜名＞」、神の自己卑下と自己疎外化〕である。このような訳で、その「＜最初の、起源的な、支配的なしるし＞に基づいて、その＜しるしのしるし＞として」（「啓示のしるし」として）、「そのほかにも神の永遠の言葉の被造物的なしるしが存在する」。先ず以て「啓示ないし和解の實在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉（「最初の起源的な支配的なしるし」）であるイエス・キリスト自身を起源とするその最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の實在」、すなわち預言者および使徒たちの「イエス・キリストについての言葉、証言、宣教、説教」としての第二の形態の神の言葉である聖書が「啓示との＜間接的同一性＞」（啓示との区別を包括した同一性）においてその「＜しるしのしるし＞」（「啓示のしるし」）として客観的可視的に存在している、また第三の形態の神の言葉である「教会に宣教を義務づけている」第二の形態の神の言葉である聖書を、自らの思惟と語りにおける原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準とした教会の＜客観的＞な信仰告白および教義（Credo）としての第三の形態の神の言葉であるイエス・キリストの教会の宣教が＜しるしのしるしのしるし＞として客観的可視的に存在している。「まさに顕ワサレタ神こそが隠サレタ神である」まことの神（「神の顕現」）にしてまことの人間（「神の隠蔽」、「神の自己卑下と自己疎外化」）、「ナザレのイエスという人間の歴史的形態」としての「イエス・キリストの＜名＞」、この「イエス・キリストと地上における可視的なみ国」が客観的に存在している——「これこそ、神ご自身によって造り出された……神を直観と概念を用いて把握し、したがってまた神について語ることができる＜偉大な可能性＞である」。このことについて、形而上学的にその一面だけを抽象し固定化し全体化した、それ故にローマ・カトリックの抽象的ニ「神の一つの面だけを…考える」分割、「主および創造者なる神だけを考える」分割、このことを「念頭に置いた神の認識可能性」の教説は、認識し自覚していないのである。すなわち、ローマ・カトリックは、自然神学の段階で停滞しているのである。



そのような訳で、バルトは、『教会教義学 神の言葉』で、次のように述べている——人間学的領域における「哲学、歴史学、心理学等は、この〔第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているキリストにあつての神としての神、その神の啓示、その神の認識可能性、信仰の認識としての神認識、啓示認識・啓示信仰、人間的主観に実現された神の恵みの出来事の可能性についての〕神学的問題領域のどれにおいても、事実上、教会の自己疎外の増大以外のなにものにも役立ちはしなかった。神についての教会の語りの墮落と荒廃以外の何ものにも役立ちはしなかった」。したがって、その時には、「哲学は哲学であることをやめ、歴史学は歴史学であることをやめる」し、自然神学の段階における「人間学の後追い知識」として「混合神学」、「人間学的神学」、「哲学的神学」としての「キリスト教哲学は、それが哲学的であったなら、それはキリスト教的ではなかった」し、「それがキリスト教的であったなら、それは哲学的ではなかった」。このような訳で、われわれは、「われわれが哲学的用語をつかうという事実にもかかわらず、神学は哲学的試みが終わるところから始まる」し、知覚と概念を用いた類的機能を持つ人間の理性的な知的営為であるところの、第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているキリストにあつての神としての神、その神の啓示に拘束されている「神学は、方法論的には、ほかの学問のもとで何も学ぶことはないのである」。このような訳で、第三の形態の神の言葉に属する教会の宣教およびその一つの補助的機能（教会的な補助的奉仕）としての神学における思惟と語りが、「キリスト教的語りの正しい内容の認識として祝福され、きよめられたものであるか、それとも怠惰な思弁でしかないかということは、神ご自身の決定事項であって、われわれ人間の決定事項ではないのである」。したがって、その思惟と語りは、「『主よ、私は信じます。私の不信仰を助けて下さい』というこの人間的態度〔「祈りの態度」〕に対し神が応じて下さる〔「祈りの聞き届け」〕ということに基づいて成立しているのである」。